

文語歌曲 敦盛と忠度（青葉の笛）

谷田貝常夫

これは、平家物語よりとられ、その中にも一抹のペイソス誘ふところ大なる筋書きを取上げたれば、大方の同胞が胸搏たれて心の奥に仕舞ひこみをる歌曲なり。

一番は巻九の「敦盛最期」、二番は巻七の「忠度都落」を主題にし、歴史的順序を逆にせるは意圖的ならずや。

青葉の笛 大和田建樹作詞

田村虎蔵作曲

一、一の谷の軍破れ／討たれし平家の公達あはれ

寒き須磨の嵐に／聞えしはこれか青葉の笛

二、更くる夜牛に門を敲き／わが師に託せし言の葉あはれ

今は際まで持ちし簾に／残れるは「花や今宵」の歌

榮華をほこりし平家も、清盛亡き後は源氏に押しにおされて、瀬戸内を西へと逃れしが、一ノ谷の戦にて源範頼、義経により壊滅的な敗北を喫せり。そのをり、「平家の君達（敦盛）、助け船に乗らんと、汀の方へぞ落ち給ふらむ。」きんだちは公達とも書かれ、音は君達（きみたち）の轉なり。笛の名手といはれ、祖父の忠盛が鳥羽院より賜つた小枝、またの名青葉なる龍笛を譲り受く。敦盛この時十七歳。練貫に鶴縫うたる直垂に萌黄句の鎧着て鍬形打つたる甲の緒締め、金作りの太刀を佩いたる「武者一騎、冲なる舟に目をかけて、海へとざつとうち入れ、五六段ばかり泳がせたるを」見掛けた熊谷次郎直實、「あれは大將軍とこそ見参ら候らへ。まさなうも敵に後ろを見せさせ給ふものかな。返させ給へと扇をあげれば、招かれて取つて返す」直實、組ついて首をかかんと甲を仰げて見ると、美麗なる顔の若者なり。己れが子小次郎ほどの齡と見受けた直實、「あはれ助け奉らばや」と躊躇ひたるが、後ろを見るに味方の五十騎ばかりが近づき來。首をかいだれど敦盛の腰に携へをりたるは青葉の笛なり。この龍笛、今も雅樂にて重用さるる樂器にて、煤竹を細き櫻樺にて卷き、鉛の錘を入れたれば、その高音遠くにまで聞こゆ。前夜聞きたる笛の音、その吹き手なりしかと直實一段と感ずるところありて、遂には髪をおろし、法然の信者となる。高野山には、敦盛と直實の墓が並び立てられをること、知る人は知る。因みに、蘭科に敦盛草あり。袋狀にふくらみたる花瓣の、敦盛が負ひたる母衣（ほろ・流れ矢を防ぎぐとともに旗指物ともなれり）に似たりとされたる命名なり。片や熊谷草あり、同じく蘭科の敦盛草屬にくみいれられたりとか。

須磨寺やふかぬ笛きく木下闇 芭蕉

笛の音に波もよりくる須磨の秋 蕪村

（『徒然草』に、「女の履ける足駄にて作れる笛には、秋之鹿必ず寄るとぞ」とあり。）

二番もこれも廣く知られたる故事にして、薩摩守平忠度、一門の都落ちの途次、「侍五騎、童一人、

我が身共に七騎、取つて返し、五條の三位俊成卿の宿所におはして」「忠度と名乗給へば、落人歸り來たりとてその内騒ぎあへ」たるも、大聲にて事情説明したれば、中なる俊成、「さる事あるらん、その人ならば苦しかるまじ、入れ申せ」と忠度を招じ入れたり。忠度「一門の運命早盡き候ひぬ。撰集のあるべき由承り候ひしかば生涯の面目に一首なりとも御恩を蒙らうと存じ」「これに候ふ卷物のうちに、さりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩を蒙つて、草の陰にても嬉しと存じ候はば、遠きお守でこそ候はんずれとて、日頃詠み置かれたる歌共の中に秀歌とおぼしきを百餘首、書き集められたる卷物を、・・・鎧の引合より取り出でて、俊成卿に奉る。」

忠度、最期は一ノ谷にて討たれたるが、簾に結ばれたる文には、「旅宿の花」なる題にて「行く^ゆれて木の下かげをやどとせば花やこよひのあるじならまし」の一種認めありたり、それを知れる敵味方、文武に秀でたる人物を失ひしを惜しめりといふ。

琵琶法師が何百年と歌ひ繼ぎ、音樂的に練りにねりきたりし平曲の趣意を、五線紙に載せられてゐる歌曲なれば、三拍子と日本にはなかりしリズムなれどもシンプルに扱ひ、日本の旋法と二短調を組合せて、かく日本人に廣く迎へ入れられたるものとなりたりと推論せらる。

(平成二十九年八月十四日受附)